

ボージャのラサ理論とラサの三段階説

本田義央

0. はじめに

インド 11 世紀の詩論家ボージャ (Bhoja) は、その主著『シュリンガーラプラカーシャ』(Śṛṅgāraprakāśa)において、シュリンガーラ(śṛṅgāra)、思念(abhimaāna)、自我意識(ahankāra)をラサ(rasa)と考える彼に独特のラサ理論を展開している。本論文では、まず、ボージャにとっての真のラサであるシュリンガーラとはなにか、ということ、そしてそれをシュリンガーラであるとするボージャの着想の背景を明らかにし、つづいてラサが前段階、中段階、後段階という段階を経て愛(preman)とよばれる最高潮に達するとするラサの三段階説をとりあげる¹

1. ボージャのラサ理論

1. 1. ボージャは、『シュリンガーラプラカーシャ』第I章の冒頭において、同書全体のエッセンスともいうべき12の詩句を掲げる。そのなかの第6および第7の詩句において、ボージャは、彼のラサ理論の体系においては、シュリンガーラが唯一のラサであり、彼のラサ理論が従来のラサ理論とは明確に区別されるべきであることを次のように述べる²。

¹ラサ理論についての一般的な事項ならびにボージャ以外のラサ理論との相違については本田(2004)を参照されたい。

²SP 4.5: śṛṅgāravīrakaruṇādbhutaraudrahāsyabībhatsa-vatsalabhayānakaśāntānāmnaḥ / āmnāsiṣur daśa rasān sudhīyo vyaṃ tu śṛṅgāram eva rasanād rasam āmanāmaḥ // 6 // vīrādbhutādiṣu ca yeha rasaprasiddhiḥ siddhā kuto 'pi vaṭṭa-yaḥśavad āvibhāti / loka gatānugatikatvavaśād upetām etāṃ nīvartayitum eṣa pariśramo naḥ // 7 //

恋情(śṛṅgāra)・勇武(vīra)・悲愴(karuṇa)・奇異(adbhuta)・憤激(raudra)・滑稽(hāsyā)・憎悪(bībhatsa)・優しさ(vatsala)・驚愕(bhayānaka)・静寂(śānta)と呼ばれる十のラサを賢者達は伝承してきた。しかし、我々は、味のゆえに(rasanāt)、シュリンガーラだけをラサであるという。そして、この世では、勇武や奇異などがラサとして常識的に知られているが、[その常識は]「このイチジクの木にはヤクシャがいる」³と[いう常識がなりたつのと]と同じように(vatayakṣavat)、根拠なくして成り立っていると思われる。世間では、慣習に盲従するがゆえに、[その常識に]したがっているが、そ[の常識]をとり除くために、私は、この[『シュリンガーラプラカーシャ』著述という]努力をする。

ここでは、恋情をはじめとする十のラサが伝承されているといわれている⁴。しかし、ボー

³ブラシャスタパーダは、伝承(atīthya)を信頼できる人の言葉(āptopadeśa)に含める。また、ジャヤンタパッタは、このイチジク云々の表現を伝承の例としてあげ、信頼にたる教示者が確定できないから、伝承は正しい認識手段たるアーガマではない、と説明している(Nyāyamañjarī 1.168.1: anirdiṣṭappravaktṛkapravādaparam-parā caitihyam [iha vaṭe yakṣaḥ prativasati] iti na cāyam āgamaḥ āptasyopadeṣtur anīścayād iti //)。ボージャはSP XXVで恋のはじまり(prathamānurāga)を引き起こす要素としての認識手段(pramāṇa)について論じるが、同章後半からXXVI章は写本が失われているため、ボージャ自身がSPにおいて伝承をどのように論じたかという点の詳細は確認できない。ここでボージャのいう認識手段は、恋のはじまりを引き起こすか否か、すなわち有効な活動(arthakriyā)をもたらすかどうかという観点で論じられるもので、それにもとづく認識の真偽は問題とならない。したがって、そこでは正しい認識手段に似て非なるもの(pramāṇabhāsa)もまた認識手段として説かれる。

⁴Nāṭyaśāstraがあげる八つのラサに、静寂と優しさを加えている。バラタ以降の各文学理論家の説におけるラ

ジャはそれらをラサとみなすのは単に慣習にしたがっているだけであり、彼にとってのラサは、唯一のシュリンガーラであるという。

1. 2. ボージャは、彼が『シュリンガーラプラカーシャ』に先立って著した文学理論書『サラスヴァティーカンターバラナ』(*Sarasvatīkaṇṭhābharāṇa*)で次のようにいう⁵。

「ラサ」「思念」「自我意識」「シュリンガーラ」というようにいわれるもの、それとの結び付きにもとづいて、文学作品(*kāvya*)は、魅力的なものとなる。

ここで、ボージャは、「ラサ」を「思念」「自我意識」「シュリンガーラ」⁶とよび、文学作品が魅力をそなえたものであるためには、それとの結び付きが必要であるということを述べている。この詩句に対するバツタナラシンハ(Bhaṭṭa Narasiṃha)の注 *Vyākhyā* は⁷、次のように述べる⁸。

[ラサのある人々(*rasika*)が] それによって [何かを] 味わい(*rasyate*)、快として認識されうるがゆえに(*anukūlavedanīyatayā*)、苦をも楽として [ラサのある人々が] それによって、思念する(*abhimanyate*)、それによってラサのある人々が「私」という意識をもつ(*ahaṅkriyate*)もの、それによって [ラサのある人々が] 頂上(*śṛṅga*)に、すなわち、高まり(*ucchraya*)に到達する(*rīyate*)、そのようなものが実にある。[それは] すべての人にとって、自己認識によって成立し、あれ

サの数の問題については Raghavan(1967) が詳しい。

⁵SKĀ V.1: raso 'bhimāno 'haṅkāraḥ śṛṅgāra iti gīyate / yo 'rthas tasyānvayāt kāvyam kamaṇīyatvam aśnute //

⁶'śṛṅgāra' は、愛、情熱、情欲等を意味する。語義解釈としては、たとえば、「頂上(*śṛṅga*)つまり最高の状態(*uttamatva*)に達する(*iyarti*)」(*Kśīrasvāmin's Amarakośodghāṭana on Amarakośa I. 6.17: śṛṅgam uttamatvam iyarti śṛṅgāra*)と説明する。

⁷Bhaṭṭa Nṛsiṃha とも呼ばれる。*Daśarūpaka* に対する注釈 *Vyākhyā* の作者と同名で、同一人物とも言われるが、詳細は不明である。SKĀ に対する注釈 *Vyākhyā* は第 V 章の一部が、Raghavan (1978, 412-413) に校訂され、I 章から II 章前半までが、上村 (1976a, b, c) として校訂されている。

⁸Bhaṭṭanarasimha's *Vyākhyā* on SKĀ V. 1: (yena) rasyate, yaiḥ (yena) anukūlavedanīyatayā duḥkham api sukhatvena abhimanyate, yena rasikaiḥ ahaṅkriyate, yena śṛṅgam ucchrayo rīyate, sa khalu tādr̥ṣo 'sti sarvajanasvasamvedana-(siddhaḥ) tattadupādhiṇā (tena) tena rasābhimānādīśabdena abhidhīyamāna(h) svādātmā (I)

これの添性(*upādhi*)をとめない、「ラサ」「思念」などの語によって呼ばれ、[それは] 味わいを本質とする(*svādātmā*)。

この注釈によれば、ラサとは、それによってなにかを味わい、それによってなにかを思念し、それによって「私」という意識をもつもので、それによって頂上に達するものである。そしてそれは、「ラサ」「思念」「自我意識」「シュリンガーラ」などと呼ばれるのである。

ボージャは、次のような詩句を引いている説明する⁹。

[恋する男性は]「恋人は、まさに私が好むことをしてくれる」と思う。[しかし] 彼女がしてくれることが好ましいことに気づかない。

恋をしている男性は、相手の女性が、自分にとって好ましいことをしてくれているから、自分はその女性を好むのだと思い込んでいる。しかし、実際には、恋人である女性のすることはなんであれ好ましく、魅力的なのである。それを好ましく感じるのは、あくまでも男性側の意識である。

さらに、相手が何もしていなくても、人は相手に対して好意を抱くことがある。ボージャはバヴァブーティの戯曲『ウッタララーマチャリタ』(*Uttararāmacarita*)から次の詩節を引く¹⁰。

自分にとって好ましい人は、なにもしてくれなくても、[その人の近くににいるということだけで] うれしくて、つらさを取り去ってくれる。そのような人は彼にとって、言葉にできないほど素晴らしいものである。

この場合は、恋人がなにかをしてきているわけではなく、ただそばにいただけである。もし、好ましいことをしてくれるから好ましく感じるというのであれば、このようなことはありえないだろう。この場合のうれしさは、受け手の思

⁹ŚP 663.1: yad eva rocate mahyaṃ tad eva kurute priyā / iti vetti na jānāti tat priyaṃ yat karoti sã // 典拠は不明である。

¹⁰ŚP 663.3: akiñcid api kurvāṇaḥ saukhyaiḥ duḥkhāny apohati / tat tasya kimapi dravyaṃ yo hi yasya priyo janaḥ // (*Uttararāmacarita* II. 19)

念にもとづいている。さらに、ボージャは次の詩句を引く¹¹。

恋人は、苦痛をあたえながらも快感を生みだす。
恋人の爪で苦しめられているときでも、両乳房
は [快感で] ぞくぞくする。

性行為の際に、乳房に爪をたてられた女性は、痛みを与えられているにもかかわらず、それを快く感じる。この場合も、苦痛を快感とうけると受け手の側の意識にもとづいているはずである。ボージャはこのような受け手の側の意識を思念と呼んでいるのである。

1. 3. ところで、ヴァーツヤヤナ (Vātsyāyana) の『カーマストラ』(Kāmasūtra) において、快感 (prīti) が四種に分類される際、その中に「思念によるもの (ābhimānikī)」がある。それは、観念 (saṅkalpa) からおこるものであり、外界の対象や感覚器官に依存しない快感とされる¹²。男女は性行為の際におなじくよろこびを見出すが、男性と女性では、その見出し方はことなる。男性は、「私はこの女性を自分のものにしていく」(abhiyoktāham) といかたちでよろこびをおぼえる (anurajyate) のに対し、女性は「わたしはこの人のものだ」(abhiyuktāham anena) というかたちでよろこびをおぼえる。性的な快感も、思念をそれを感じる前提としている。

1. 4. 以上は、恋をする男女間の問題であるが、それをボージャは広く感情一般にまで敷衍した。シュリンガーラを、人間のすべての感情の根底にあるものとしたのである。それがなければ、一切の感情はおこることなく、それがあ

¹¹ŚP 663.5: *duḥkhaṃ danto vi suhaṃ jānei jo jassa vallho hoi / daiaṇahadiūniāṇa vi viḍḍhai tthaṇāṇa romaṇco // [duḥkhaṃ dadad api sukhaṃ janayati yo yasya vallabho bhavati / dayitanakhadūyamānāyor api vardhate stanayo romaṇcaḥ //]* (サンスクリット選元は Raghavan による。) なおこの詩節は *Gātāsapaśati* I. 100 にも収録されている。

¹²Kāmasūtra 2.1.41: *anabhyasteṣv api purā karmasv a- viṣayātmikā / saṅkalpāj jāyate prītir yā sā syād ābhimānikī //* (「感覚の対象に依存しないで観念から生じ、いまだかつて学んだことのない行為における快感が思念にもとづく快感である。」) 注釈 *Jayamaṅgalā* は、この快感の達成手段を、思念、すなわち自我意識 (ahaṅkāra) である (abhimāno 'haṅkāraḥ sa prayojanam aśyā) とする。

るからこそ、人は種々の感情を感じるのである。ボージャは次のようにいう¹³。

実に、シュリンガーラのある人 (śrīṅgārin) が、恋愛を感じ (ramate)、滑稽に感じ (hasati)、勇気を感じ (utsahate)、驚きを感じ (vismayate)、妬みを感じ (jugupsate)、悲しみを感じ (śocati)、恐れを感じ (bibheti)、静寂を感じ (sāmyati)、愛を感じ (snihyati)、誇りを感じ (garvāyate)、思念する (abhimanyate)。

ここで示されているのは、ラサ理論において恒常的感情 (sthāyibhāva) とされる個別的な種々の感情である。それらの感情を感じるのは、シュリンガーラのある人であり、シュリンガーラのない人は、それらの感情を感じることはない。思念は、種々の感情の原因であり、それは心 (cetas) によって味わわれる (rasyate) がゆえに「ラサ (味)」と呼ばれる¹⁴。心によって味わわれるとは、つまり感情を感じるということである。

2. ラサの三段階

2. 1. ボージャは、『シュリンガーラブラカーシャ』において、ラサに前段階 (pūrvakoṭi)、中段階 (madhyamāvasthā)、後段階 (uttarakoṭi) という三つの段階を設けている。ボージャが唯一の

¹³ŚP 686.3: *na hy aśrīṅgāriṇaḥ kaścid api prakarṣagāmī aprakarṣagāmī vā bhāvaḥ sambhavati / śrīṅgārī hi ramate utsahate hasati vismayate jugupsate śocati bibheti sāmyati snihyati garvāyate abhimanyata iti /*

¹⁴ŚP 696.8: *yady api śrīṅgāra evaiko rasaḥ tathāpi tat-prabhavā ye ratyādāyaḥ te 'py uddīpanavibhāvair uddīpyamānās tadanupraveśād eva sañcāriṇām anubhāvānām ca nimittabhāvam upayanto rasavyapadeśaṃ labhante / yathā hy abhimāno ratyādīnām nimittam cetasā rasyamāno rasaḥ tathā ratyādāyo 'pi haṣadhr̥ticintautsukyādīnām manovākkāyabuddhiśarīrārambhāṇām ca nimittam abhimānānu-praveśenaiva cetasā rasyamānā rasā ity ucyante /* (「シュリンガーラだけが唯一のラサであっても、それから生じる恋愛など [の恒常的感情] が、複数のかき立てる条件 (uddīpanavibhāva) によってかき立てられるとき、[それら恋愛などには] まさにそ [のシュリンガーラ] が参入しているから (tadanupraveśāt)、一時的感情と感情表現の原因となり、[恋愛などが] ラサと呼ばれることとなる。実に、恋愛など [の恒常的感情] の原因である思念を心が味わうとき [思念は] ラサ [と呼ばれる]。それと同様に、[一時的感情である] 歓喜・充足感・物思い・期待などの [原因であり]、心・言葉・体・意識・身体的活動 [すなわち感情表現] の原因である恋愛など [の恒常的感情] もまた、思念の参入のおかげで、心によって味わわれるとき、ラサといわれる。」)

ラサとする自我意識あるいは思念は、そのうちの第一段階にあるものであり、そこから種々の感情がおこる。その種々の感情がおこっている段階が中段階である。そして、中段階ののち、そこで起こった種々の感情が愛 (preman) へいきつく段階が、後段階である。この三つの段階を説く際に、ボージャは、ダンディンの『カーヴィヤ・アードルシャ』(Kāvyaḍarśa) II. 275 を利用している。¹⁵

よりつよい喜びの表現 (priyatarākhyāna) が preyas であり、ラサによって美しくなった表現 (rasapeśala) が、ラサを有する (rasavat) であり、高まった自我意識 (rūḍhāhānkāra) がある [表現] が、ūrjasvin である。それら三つは、[修辭 (alaṅkāra) という呼び名に] ふさわしい卓越性がそれにもとづいてあるとき (yuktotkarṣa)¹⁶、それ [つまり修辭] である。

ここで、ダンディンがとりあげているのは、preyas, rasavat, ūrjasvi という三つの修辭である。後にみるように、ダンディンのこの詩節をボージャは独自の解釈で自身のラサ理論の説明に使用する。しかし、ダンディン自身は、ただ、それらを三つの修辭としてあげているにすぎない。ふさわしい卓越性がそれにもとづいてあるとき (yuktotkarṣa) にそれらは修辭 (alaṅkāra) であり、逆にふさわしい卓越性がない場合には修辭ではなく美質 (guṇa) である¹⁷。

¹⁵KĀ II.275: *preyaḥ priyatarākhyānaṃ rasavad rasapeśalam / ūrjasvi rūḍhāhānkāraṃ yuktotkarṣaṃ ca tat trayam //*

¹⁶Prabhā on KĀ II.275: *yuktotkarṣaṃ ceti / yuktaḥ alaṅkāravāpadeśopayuktaḥ utkarṣaḥ vācyasobhā yasmāt tat /*

¹⁷この点をボージャは次のように説明する。ŚP 675.22: *yuktotkarṣaṃ ca tatrayam ity anenāyuktotkarṣāṇāṃ trayāṇāṃ apy ūrjasvirasavatpreyasāṃ guṇatvam eva nālaṅkāratvam iti jñāpayati / tathā hy aurjityaṃ bhāvikatvaṃ preya itī padaiḥ trayo 'py ete guṇeṣūpadiṣṭāḥ /* (『ダンディンは、先に提示した Kāvyaḍarśa II.275 において』「ふさわしい卓越性がそれにもとづいてあるとき (yuktotkarṣa) [preyas, rasavat, ūrjasvin という] 三つは、それ [修辭] である。」[と述べること] によって、ふさわしい卓越性がなければ、ūrjasvin, rasavat, preyas という三つはどれも美質でしかなく、修辭ではない、ということを知らしめている。すなわち [卓越性をそなえていないものは、『シュリンガーラプラカーシャ』第 IX 章で述べたように] aurjitya (「強さ」、bhāvikatva (「感情表現性」), preyas (「より好ましいさ」) という語によって、それらは三つとも美質の内に挙げられているからである。)

2. 2. ボージャはこのダンディンの詩節を利用し、ラサの三つの段階を説明する。その際に前提となるのは、サーンキヤ学派の説である。サーンキヤ学派では、心身と世界は、物質的な根本原質から展開してあらわれて、再び根本原質に解消する、と考える。この根本原質は、純質 (sattva)、激質 (rajas)、闇質 (tamas) という三つの要素 (guṇa) からなっており、原質においてはそれら三つの要素は平衡状態にあるが、原質が展開するときには、その平衡状態がくずれて、心身と世界が展開する。根本原質からまず理性 (buddhi) が展開し、理性から自我意識 (ahānkāra)、つづいて自我意識から思考器官 (manas) と五つの知覚器官 (buddhīndriya) と行為器官 (karmendriya) 及び五つの微細元素 (tanmātra) が展開する。そしてその微細元素から五つの粗大元素が展開する。この展開においては、転変 (pariṇāma) 説と因中有果論がその特徴となっている。そして、根本物質とはべつに、一切の行為をはなれた靈我 (puruṣa) という精神原理をたて、根本原質と靈我の二元論を立てる。

3. 前段階

さて、ボージャは、ラサの前段階について次のようにいう¹⁸。

そこ [上記 KĀ II. 275] で、[ダンディンは] 「高まった自我意識の表現が ūrjasvi [という修辭] である」(ūrjasvi rūḍhāhānkāram) [と述べる] ことによって、特定のアートマンに [映像というかたちで] 存し (ātmaniśeṣaṇiṣṭha)¹⁹、卓越

¹⁸ŚP 674.1: *tatra ūrjasvi rūḍhāhānkāram ity anenātmaviśeṣaṇiṣṭhasyotkrṣṭādrṣṭajanmano 'nekajanmānubhavasamskārasādītadradhimnaḥ samagrātmagūṇasampadudayātiśayahetor ahaṅkāravīśeṣasyopasamgrahād ahaṅkārabhimānaśrṅgārādyaparanāmno rasasya mānamayavikārarūpeṇābhimānināṃ manasi jāgrataḥ pūrvāṃ koṭim upavarṇayati /*

¹⁹'ātmanīṣṭhaṃ guṇaviśeṣam' という表現が ŚP I.v.3 に見られる。ŚP 2.5: *ātmanīṣṭhaṃ guṇaviśeṣam ahaṅkāratasya śrṅgāram āhur iha jīvitam ātmayoneḥ / tasyātmasaktirasanīyatayā rasatvaṃ yuktasya yena rasiko 'yam itī pravādaḥ //* (「ここ [この論書] では、アートマンに [映像というかたちで] 存する自我意識の特殊なグナをシュリンガーラとよぶ。[それは] カーマの命である。それはアートマンの能力によって味わわれるべきものであるからラサである。そのそなわっている人が、「この人にはラサがある (rasika)」といわれる」) そ

した不可見力 (adr̥ṣṭa) から生じ、数多くの過去の生での経験の潜勢力にもとづいて獲得される堅固さを有し、一切のアートマンの十全な属性の卓越した現れの原因であり自我意識の特殊態 (ahaṅkāra viśeṣa) であり、ひとまとめにいえば、自我意識、思念、シュリンガーラ等という別名でも呼ばれるラサが、思念からなる変容として (mānamayavikārarūpeṇa)²⁰ 思念する人 (abhimānin) の心においてめざめるが、[そのラサの] 前段階について述べている。なぜなら、[ŚP I. v.4 ですでに次のように] 述べた。「純質を本性とする人々 (sattvātman) の心に、汚れのない特定のダルマから生じ (amaladharmaviśeṣajanman), 他生での経験によって形成せられた習気 (vāsanā) にもとづいて高まり、アートマンの一切の十全さ (sarvātmasampat) の卓越した現れの唯一の原因である、思念よりなるある変異 (vikāra) が目覚める (jāgati)」

ここでボージャはラサの前段階を説明している。まず、そのラサを有する人について、ボージャはいう。ラサは、「特定のアートマンに存する」(ātmani viśeṣaṇiṣṭha)²¹。すなわち、あらゆる人にあるわけではなく、「ラサのある人」(rasika)

して、その箇所をボージャは ŚP VII で次のように注釈している。ŚP 398.11: athātmani pratibimbadvāreṇāvasthūasyāhaṅkāraguṇaviśeṣasya dharmārthaphalabhūta-
tr̥ṭiyapuruṣārthajīvitasya śr̥ṅgārasyaābhimānāparanāpno
yāny āvirbhāvākāraṇāni yāni ca tatkāryāṇi tāny anantara-
ślokena nirdīśati *sattvātmanām amalajanmaviśeṣajanmā*
ityādi / (「さて、[シュリンガーラとは、アートマンに] 映像というかたちで (pratibimbadvāreṇa) 存する、自我意識の特殊な属性であり、ダルマとアルタの結果である [カーマという] 人生の三番目の目的の命 (jīvita) であり、思念とも呼ばれるのであるが、[その] シュリンガーラが [アートマンに] 顕現する諸原因 (āvirbhāvākāraṇa) とその [シュリンガーラの顕現の] 諸結果 (tatkārya) とを、すぐ後の [『シュリンガーラブラカーシャ』第一章冒頭の第四番目の] シュローカで、‘sattvātmanām amalajanmaviśeṣajanmā’ 云々と示している。’) したがって、ここでいわれているアートマンは、自我意識とは映像として関係する精神原理としての靈我 (puruṣa) を指すことになる。

²⁰ŚP 398.21: mānamaya ityanena cāsyābhimānātmano
‘bhimāna eva mūlam ity anyāvaṣṭambhaṃ nirācāṣṭa iti / (「また、[思念よりなる] というこの表現で、それ (シュリンガーラ) は、思念を本質とする、[すなわち] 思念だけにもとづく、というように、[思念以外の] 他のものであるに依る依存を排除している。)

²¹ここで「アートマン」は、サーンキヤ学説でいう精神原理としての靈我 (puruṣa) を指す。したがって、映像という形で、といわれる。

とよばれる特別の人だけにあるものである²²。それは、ここに引用される ŚP I. v. 4 では、純質を本性とする人 (sattvātman) といわれている。

次に、その特別の人に、ラサが生じる原因は、「卓越した不可見力」である。これは引用される ŚP I. v.4 では「汚れのない特定のダルマ」といわれている。ここでいうダルマは、サーンキヤ学派がいう理性 (buddhi) の八つの相あるいは状態の一つである²³。それは、『ユクティディーピカー』(Yuktidīpikā) によれば、天啓聖典 (śruti) や古伝書 (smṛti) によって規定される行為 (karman) の実践にもとづいて、理性 (buddhi) にある純質分 (sattvāvayava) が傾向性となったもの (āśayabhūta), つまり行為の余力、行為が残す潜在力である²⁴。そしてそれをボージャは「卓越した不可見力」とも呼んでいるわけである²⁵。サーンキヤ学派の説では、このダルマによって、輪廻して次の生に生まれる際の生まれ先がきまる²⁶。これを考慮すれば、ラサは過去

²²ŚP 665.4: yadi tāvat sarvasya tadā sarvaṃ jagad rasikaṃ syāt / na caitad asti / yataḥ kaścid rasikāḥ kaścit tu niraśo dṛśyate / (「まず、もし、すべての人におこるのだとすれば、世界中 [の人々] がラサをもつものであるということになってしまう。しかし、そのようなことはない。なぜなら、ラサを持つ人とラサを持たない人がいるということが経験的に知られているからである。)

²³SK 23: adhyavasāyo buddhir dharmo jñānaṃ virāga aiśvāryam / sattvikam etad rūpaṃ tāmasam asmādō viparyastam // (服部訳 (1969a, 198) 「理性は決断 (の作用をなすもの) である。(理性は純質的であるか翳質的であるかに従って、八種の状態になる。) 功德、知識、離欲、自在—これが (理性の) 純質の状態である。翳質的 (状態) はこの反対である。)

²⁴Yuktidīpikā on SK 23: tatra śruti smṛti vihītānām karmaṇām anuṣṭhānād buddhyavasthaḥ sattvāvayava āśayabhūto dharmā ity ucyate /

²⁵不可見力は、サーンキヤ学派の文献にはほとんど見出されない。一方、ヴァイシェーシカ学派では、ブラシャスタパーダ以降アートマンの属性としてのダルマとアダルマと同一視され、ヴァイシェーシカ哲学の体系のなかでは重要な位置を占めている。ここでボージャの「不可見力」という語の使用は、それが果たす役割、すなわち輪廻する先の境遇決定要因という共通性を見出した上での意図的なものであろうと思われる。

²⁶SK 44: dharmeṇa gamanam ūrdhvaṃ gamanam adhas-tād bhavaty adharmaṇa / jñānena cāpavargo viparyayād iṣyate bandhaḥ // (服部訳 (1969a, 203) 「(輪廻の主体としての微細な有機体には、) 功德によって (傾向づけられることによって)、向上 (してよりよい境遇において肉体を得ること) があり、罪過によって (より低い境遇への) 沈下がある。(原質と精神原理とを区別する) 知識によって解脱が、(その) 反対 (の無知) によって束縛があると考

になした良いおこないから生じるということになる。

そして、そのラサは、「数多くの過去の生での経験の潜勢力にもとづいて獲得される堅固さを有している」。すなわち無始以来繰り返されてきた生での種々の経験による潜勢力 (saṃskāra) をともなっている²⁷。村上(1978, 293-295)によれば、サーンキヤ学派では、一般にダルマあるいはアダルマと潜勢力は、ほぼ同一視されるとみてよい。しかし、ボージャのラサの場合には、同一とまではいえないようである。ボージャについていえるのは、ラサには過去の数多くの生での経験による潜勢力が、潜在的なかたちでそなわっているということである。

さらに、そのラサからおこる結果は、一切のアートマンの十全な要素の現れと卓越、といわれる。「アートマンの十全な要素」は、「特定の好み、見かけ、身振りなどを明らかにする」とされ、さらに「認識・楽・苦・欲・嫌悪・努力・潜勢力など」といいかえられる²⁸。後者は、ヴァイシェーシカ学派ではアートマンの属性とされるもので、潜勢力以外は、アートマンの証相

えられる。)]

²⁷SP 665.8: asādhāraṇaṃ tu pratyagātmagātānādī-vāsanānubandhi dharmakāryaṃ bhavitum arhati / (「一方、[ある人が「ラサのある人(rasika)」と呼ばれる] 共通でない[原因]は、人それぞれのアートマンに存する無始以来の潜在印象をともなった、ダルマの結果であるはずである。)」

²⁸SP 663.16, J 429.19: ucyaṭe / na ratyādibhūmā rasaḥ / kiṃ tarhi [I] śrṅgāraḥ / śrṅgāro hi nāma viśiṣṭeṣṭadṛṣṭa-ceṣṭābhivyañjakānām ātmaḡuṇasampadām utkarṣābījam buddhisukhaduḥkhecchādveṣaprayatnasamskārādyatiśaya-hetur ātmano 'haṅkāraḡuṇaviśeṣaḥ (1sa cetasā) rasyamāno rasa ity ucyaṭe / yadastitve rasiko 'nyathātve nīrasa iti / tadāvīrbhāvahetavaś ca tatprabhavā eva bhāvāḥ / (「【答】 答えよう。最高潮に達した恋愛など (ratyādibhūman) がラサなのではない。【問】 それではなに [がラサ] なのか。【答】 シュリンガーラ [がラサ] である。なぜなら、シュリンガーラとは、自我意識の特殊なグナである。[それは] 特定の好み・見かけ・身振りなどを明らかにする (abhivyañjaka), アートマンの十全な属性が卓越する原因 (utkarṣābīja) であり、[いいかえると] 認識・楽・苦・欲・嫌悪・努力・潜在印象等 [というアートマンの属性] が卓越する原因である。[そして] それが心によって味わわれるとき、ラサといわれる。[そして] それは、それがあるとき、「ラサのある人」といわれ、そうではないとき、「ラサのないひと」といわれる [ものである]。そして、諸感情は、それ (シュリンガーラ) があらわれる原因であるが、それ (シュリンガーラ) からおこるものに他ならない。)」

とされている²⁹。すなわち、それらがあることによってアートマンの存在が知られるものである。このことから考えると、「アートマンの十全な要素」とは、特定の「好み」や「見かけ」「身振り」からよみとることのできる内面的な心のはたらきと考えることが出来る。

そしてそれは、自我意識の特殊態といわれる。特殊態というのは、サーンキヤ学派では、原質の三つの要素の平衡がくずれたもの、つまり平衡がくずれ原質から展開したもののことをいう³⁰。したがって、ここで自我意識の特殊態とは、自我意識の三つの構成要素の平衡の変化によって展開したものであるということになる。それをボージャは、自我意識という同じ語でも呼び、思念あるいはシュリンガーラと呼んでいるということになる。そして、それは、思念する人の心の中で、思念からなる変異 (mānamayavikāra) として目覚めるのである。

4. 中段階

4. 1. 次の中段階は、具体的に感情がおこり、それが徐々に高まっていく段階である。ボージャは次のようにいう³¹。

[ダンディンは KĀ II. 275 で] 「ラサによって美しくなった表現が有ラサである」 (rasavad rasapeśalam) とのべることによって、[バラタが『ナーティヤシャストラ』において] 「感情を喚起する条件と感情表現と一時的感情の結合にもとづいてラサはおこる」³² [と述べているように] 恋愛などとして多様に顕現し、[さらに]

²⁹VS (Candrānanda) III.2.4: sukhaduḥkhe icchādveṣau prayatnāś cety ātmalingāni / (金倉訳 (1971, 67) 「呼吸閉目閉目生命意の行進他根の変化・楽と苦・愛と憎及び勤勇・以上は我の証相である」)

³⁰SK 36: ete pradīpakalpāḥ parasparavilakṣaṇā ḡuṇaviśeṣāḥ / kṛtsnam puruṣayārtham prakāśya bud-dhau prayacchanti // (服部訳 (1969a, 201) 「これら (三種の) 構成要素の特殊態 (である外的・内的諸器官) は、互いにその特質を異にしなが、(あたかも燈芯と油とから成る) 燈火 (がそれらの要素の協力によって対象を照らすの) と同じように、(互いに協力して) 精神原理が (享受しようと) めざすものをすべて照らし出し、理性に提供する。)」

³¹SP 674.16: rasavad rasapeśalam ity anena vibhāvānubhāvavyabhicārisaṃyogād rasanīṣpattir iti ratyādī-rūpeṇānekadhāvīrbhavato 'bhīvardhamānasya paraprakārṣa-gāmināḥ śrṅgārasya madhyamām avasthām avasthāpayati /

³²NS VI: vibhāvānubhāvavyabhicārisaṃyogād rasanīṣpattīḥ

強まって、最高潮に達する (paraprakarṣagāmin) シュリンガーラの中段階を確定している。

この中段階で、ラサは、恋愛などという具体的な感情として顕現する。感情表現や、付随する一時的感情をともなつて、最高潮へとたかまってい。このことは、ボージャによって次のようにいわれている。

恋愛などの 49 の感情は、さまざまな喚起する条件からおこる。[それらの諸感情は] シュリンガーラ自体を周囲から取り囲みつつ、多くの炎が火 (saptārcis)³³ [を高めるの] と同じように、[シュリンガーラそのものを] 高める。

ここでは、唯一のシュリンガーラが、種々の感情によって高まっていくことが、多くの炎によってさらに燃え上がる火で喩えられている。

4. 2. この中段階では、まず対象としての条件 (ālambanavibhāva) によって、感情が引き起こされる。このことをボージャは次のような比喩を用いて説明する³⁴。

たとえば、月が出ていれば月長石が滴を滴らせる (syandate) ように、太陽がでていれば日長石が炎を出す (jvalati) ように、樟脳があれば水晶が溶ける (viliyate) ように³⁵、それと同じように、あれこれの対象としての条件にもとづいて、それぞれの形相 (ākāra) に変化した (pariṇata) 感官・意識という添性 (upādhi) をそなえている、思念のある人の心に、恋愛、怒り、悲しみなどというそれぞれの感情がおこる。

ここでは、月、太陽、樟脳が対象としての条件に、月長石、日長石、水晶が思念のある人の心に喩えられている。そして、月長石におこる滴をたらすという変化と日長石におこる炎を出すという変化と水晶におこる溶解という変化が、

³³saptārcis は、saptajihva/saptajvāla ともいわれ、kāli, karālī, manojavā, sulohitā, sudhōmravarṇā, ugrā, pradīptā という七つの舌をもつとされる祭火。

³⁴ŚP 687.14, J 444.11: katham punar vibhāvānubhāvavyabhicārisamyogād rasanīṣpattiḥ [I] ucyate [I] yathendunnidher gaṇḍakaḥ syandate, yathārkasannidhes sūryakānto jvalati, yathā karpūrasannidheḥ sphaṭiko viliyate tūlīā tebhyaḥ tebhya ālambanavibhāvebhyaḥ tattadākāraparīnatendriyabuddhyupādhiyogino 'bhīmānimanasaḥ te te ratikrodhasōkādāyo bhāvāḥ samutpadyante /

³⁵「樟脳があれば水晶が溶ける」については Pollock (1998, 179n134) 同様、他の用例を見いだせていない。

ころにおこる感情に喩えられている。感官や意識は、それらの対象としての条件それぞれの形に変化し (pariṇata), 思念のある人の心の添性となる。そしてその心に、恋愛、怒り、悲しみなどの感情がおこるのである。いいかえれば、対象としての条件の形に変化した感官と意識という添性によって条件づけられた心が感情であるということが出来る³⁶。対象の形相に変化した感官や意識は、心に対する添性となる。心そのものが変化して恋愛などという感情になるわけではない。

ここでの、月長石の喩え、日長石の喩え、水晶の喩えは、それぞれ、恋愛、憤怒、悲哀という感情についての喩えとなっている。ボージャは恋愛という感情が、対象としての条件によってひきおこされる場合について、次のような例を引いている³⁷。

驚くべきことに、ハスの花びらの眼をした [女性] の、汚れない月のような顔がそばににあることで、私の [心は] しばらくの間ぼうつとしてしまい、山にある美しい月長石が液状化をうけるように、私の心は³⁸液状化という変化 (vikāra) を受けている。

この詩句は、バヴァブーティの作品『マラーティーマダヴァ』(Māratīmādhava) において、恋人となるマラーティーに初めて対面した際に、マダヴァが発した言葉である。ここでは、マラーティーの月のように美しい顔が対象としての条件であり、それによってマダヴァの心に液状化という変化、すなわち恋愛という感情がおこっている。

憤怒という感情の場合について、ボージャは

³⁶この箇所にもみられる、感官あるいは意識が対象の形相に変化する (pariṇata) という考え方は、ヨーガ学派、サーンキヤ学派、ヴェーダーンタ学派の認識論に見出されるものである川口 (1985) を参照せよ。

³⁷ŚP 687.17, J 444.14: te ratyādāyo yathā / āścaryam utpaladṛṣo vadanāmalendusānnidhyato mama muhur jaḍimānam etya / jātyena candramaṇineva mahīdharasya sandhāryate dravamayo manaso vikārah // (Mālatīmādhava III.5)

³⁸ŚP のテキストは R 版、J 版ともに 'manaso' と属格の読みを提示する。しかし、'candramaṇinā' という具格形で示されている比喩の基準との対応を考えれば、Mālatīmādhava の BSPS 版が提示する 'manasā' という具格の読みのほうが適していると思われる。

次の例を引いている³⁹。

それから、ご主人様、かの、きつい言葉 (durudāharaṇa) という苦痛を与えるもの／陽射し (ātapa) によって、シーターは、穏やかな性格である (saumya) にもかかわらず、ほんとうに不快な気持ちになり、鋭く明るい炎のような言葉を⁴⁰、思慮なく (sahasā) 発して、日長石という石 (tapanakāntasīlā) がもえあがるように、燃え上がった。

羅刹王ラーヴァナによってランカーへ連れ去られたシーターを奪還するための偵察でランカーへ赴いた猿のハヌマットが、偵察を終えランカーからインドへ戻り、主人であるラーマにその報告として語った言葉である。羅刹王ラーヴァナに乱暴な言葉を投げつけられて、シーターは怒りに燃える。

さて、次に、水品が溶ける、という喩えによって示される悲哀という感情が、対象としての条件によって引き起こされる場合について、次の詩句をボージャは例として引く⁴¹。

それから、[ラーヴァナ等という] 悪 [事をはたらく] 悪魔達は、金色の鹿に変装するというやりかたで、この [、絵に描かれている、シーターの略奪という] この [悪] 事をはたらいたが、それは既に報復がすまされたにもかかわらず [私たちに] 苦痛を与えている。空虚な [すなわちシーターのいないダングカ森の] ジャナスターナ [という場所] では、その悲しみが明らか [にみてとれる] 尊敬すべき人 [すなわちラーマ] の振る舞いによって、石でさえ泣き (roditi)、ダイヤモンドの内部でさえ、割れてしまう (dalati)。

ラーマと妃シーターは、ラーマの弟ラクシュマナとともに、自分たちが主人公として登場する

³⁹ Abhinanda; s Rāmācarita XIX. 89: *tenātha nātha durudāharaṇātapena saumyāpi nāma parūṣatvam abhiprapannā / jajvāla tīkṣaṇaviśadāḥ sahasodgiranī vāgarciṣas tapanakāntasīleva sīā //*

⁴⁰ 文字通りには、「鋭く明るい (tīkṣaṇaviśadāḥ) 言葉という炎 (vāgarciṣas)」

⁴¹ ŚP 688.5, J 444.20: *śokādayo yathā / athedaṃ rakṣobhiḥ kanakahariṇacchadnavidhinā tathāvṛttam pāpair vyathayati yathā kṣālitam api / janasthāne sūnye viśadakarūṇair āryacaritaiḥ api grāvā rodity api dalati vajrasya hṛdayam //* Bhavabhūti 作 *Uttarāmacarita* 1.28 にほぼ一致。Sharmā ed. とは、c 句下線部が異なる。また、Candrakalā 注には、同箇所について、「vikalakarūṇaiḥ」との異読あることが示されている。

叙事詩『ラーマヤナ』の一場面を描いた絵画を見ている。そこに描かれているのは、三人が祖国コーサラをはなれ、ダングカ森で追放者として暮らしていたときに、ラーマが羅刹の王ラーヴァナの友人が姿を変えた金色の鹿によっておびきだされ、その隙にシーターがラーヴァナによって連れ去られた場面である。今、ラーマはすでにランカーでのラーヴァナ討伐を終え、連れ戻した妃シーターとともにいるにもかかわらず、そのつらい出来事がまざまざと思いだされる。「ああ、私にはジャナスターナでの出来事がまるでいまおこっているかのようにおもえる」(hanta vartamāna iva me janasthānavṛttāntaḥ pratibhāti) というラーマに、弟のラクシュマナが応じたのが上の詩句である。ここでは「溶ける」(vilīyate) ではなく「泣く」(roditi) と「割れる」(dalati) となっている。ここで、石やダイヤモンドは、ラーマの堅固な心をあわらしている。いかに堅固な心とはいえ、愛するシーターが連れ去られたことによって、そこに悲哀という感情がおこるのである。

4. 3. 次に、ボージャは、対象としての条件によってひきおこされた感情が、かき立てる条件によってかき立てられることを次のように説明する⁴²。

さらにまた、たとえば月の出に海水が動揺する (kṣubhyati) ように、たとえば不規則な生活のせいで病気が悪化する (abhivardhate) ように、不品行な人がいると品行方正な人が極度に苦痛を感じるように、それと同じように、あれこれの経験による潜在印象をそなえた心に、あれこれのかき立てる条件から、あれこれの変化 (vikāra) がおこり、あれこれの感情のたかまり (abhivṛddhi) に至る。

ここでは、月の出、不規則な生活、不品行な人が、かき立てる条件に、そしてそれらによってかきたてられる、つまりたかまる感情が、海水、病気、品行方正な人、そして、たかまりへ至る

⁴² ŚP 688.10, J 444.23: *atha yathendūdaye samudraḥ kṣubhyati, yathāpathyasevayā vyādhir abhivardhate, yathānāryasannidheḥ (Isādhuḥ1) sutarām (2duhkhākaroti2), tathā tebhyas tebhya uddīpanavibhāvebhyas tattadanubhavasamskārayogino manasas tattadbhāvābhivṛddhaye te te vikāra upajāyante /*

変化が、海水の動揺、病気の悪化、品行方正な人がおぼえる苦痛にたとえられている。

まず、動揺 (kṣobha) の場合にボージャはカーリダーサの『ラグの系譜』の一詩句を引く⁴³。

彼 [アジャ王] は、生まれ持った冷静さを失い、涙でむせびながら嘆いた。周囲を熱せられると鉄でも柔らかくなる。[まして人間の] 心に関してなにをいうことがあるだろうか。

この詩句は、妃インドゥマティーの急逝にみまわれたアジャ王を描写している。ラーマの祖父であるアジャ王は、冷静さを生まれもち、心が動揺することは通常の場合にはありえない。しかし、インドゥマティーの突然の死という極度の苦しみによって、冷静さを失い、涙でむせび泣いている。加熱すれば鉄でさえ柔らかくなるが、アジャの心も極度の辛さによつて冷静さを失っている。この場合、かき立てる条件は、妃インドゥマティーの死であり、海にたとえられている感情は、アジャ王の本来の冷静さ、すなわち堅固な心にあたり、その心が柔らかくなるという変化は、月の出に海におこる波立ちにあたる。

増大 (abhivṛddhi) の場合について、ボージャは同じくカーリダーサの『クマーラサンバヴァ』から次の詩句を引く⁴⁴。

彼女 [ラティ] は、彼 [マドウ] をみて、激しく泣き、両胸をおさえて乳房を打った。なぜなら、親しい人が面前にいて、悲しみが喉をきったかのように、わきあがったから。

カーマ (愛神) によつて苦行を妨げられたことに怒ったシヴァ神は第三の眼から光線を発し、カーマを焼き殺す。カーマの妻ラティは、衝撃のあまり気絶し、気絶からさめたときに見出したのは、灰になった夫カーマであった。ラティは、同行していたはずのカーマの親友マドウを探す。そして、ラティのよびかけにこえてマドウがラティの前に姿をあらわしたときの、ラ

⁴³ŚP 688.12, J 444.26: te tatṣobhe yathā / vilalāpa sa bāṣṭagadgaḍam sahaḥāṃ apy apahāya dhīratām / abhitaptam ayo 'pi mārdavaṃ bhajate kaiva kathā śarīriṣu // (Raghuvamśa VIII. 43.)

⁴⁴Kumārasambhava IV. 26: tam udīkṣya ruroda sā bhṛṣaṃ stanasambādham uro jaghāna ca / svajanasya hi duḥkham agrato vivṛtadvāram ivopajāyate //

ティを描いている。夫カーマの親友である親しいマドウの姿をみて、ラティの悲しみは一気にわきあがった。ここで、かき立てる条件は、眼前にあらわれたマドウであり、それによつて、病気が不品行な生活ゆえに悪化するのとおなじように、夫カーマを亡くしたラティの悲しみが増大するのである。

対立 (prātikūlya) の場合について、ボージャは、カーリダーサの作品『ヴィクラマ・ウルヴァシーヤ』から次のような例を引く⁴⁵。

五本の矢もつ [カーマ神] は、容易には手に入らないもの [であるウルヴァシー] をもとめる気持ちを押しえきれない私の心を真っ先に弱らせる。[その芳香で愛情をかき立てる] マラヤ山から吹く風でその青白い [枯] 葉をすっかり落とした庭園のマンゴーの木々が新芽を見せているときにおいておや。

ブルーラヴァス王は、正妃の手前、天女ウルヴァシーに対する恋心をおさえなければならぬのだが、しかしそれをおさえることができない。その恋心を、マラヤ山から吹く涼しい風や、マンゴーの新芽という恋心をかきたてる要素が、ブルーラヴァス王の気持ちに反して更にかき立てるのである。

4. 4. 対象としての条件によつて心のなかにおこり、かき立てる条件によつてかき立てられた感情に、さらに感情表現と一時的感情がおこる。それをボージャは次のように説明する⁴⁶。

たとえば、ただ一本の木などに、幹・大枝・小枝・つるをはじめとする [種々の] 様相 (prakāra)

⁴⁵ŚP 688.18, J 445.4: tatprātikūlye yathā / idam asulabhavas tu prārthanād umivāraṃ prathamam api mano me pañcabāṇaḥ kṣiṇoti / kim uta malayavātonmālītāpāṇḍupatir upavanasahakārair darśiteṣv ankuṛeṣu // (Vikramorvaśya II.6)

⁴⁶ŚP 688.21, J 445.7: atha yathaikasyāpi bhūruhādeḥ kāṇḍaskandhaśākhāvitāpādayaḥ prakārāḥ, pallavapatrapuṣpaphalāsampadādayo vikārāḥ, ekasyāpy ambhasaḥ pravāhāvartabudbudatarāṅgādayo vivartāḥ, muktāphalaphenalavaṇakarakādayo vipariṇāmāḥ, ekasyāpi dhvanes taramadhyamandrakruṣṭādayo bhedaḥ, varṇapadavākya-kōjītādayo avacchedāḥ, ekasyāpi vāyoḥ pravahāvahapari-vahādayaḥ skandhāḥ prāṇāpānavyānādayo 'nubandhāḥ tebhyaḥ tebhya upādhibhyo jāyante, tathaikasyāpi rati-krodhaśokādes tebhyaḥ tebhya upādhibhyas te te 'nubhāvā vyabhicāriṇāś cābhyantarā bāhyāś ca vyavasthāsam-plavābhyām upaplavante /

と、十全な(sampad)⁴⁷芽・葉・花・実などという変容(vikāra)が、あれこれの条件(upādhi)から生じるように、[また]水は一つであっても、[それに]流れ・渦・あぶく・波をはじめとする変形(vivarta)と⁴⁸、真珠・[団塊状の]泡(phenā)・塩・雹などという変化(vipariṇāma)があれこれの条件から生じるように、[また]音(dhvani)は一つであっても、[それに]高(tāra)・中(madhya)・低(mandra)・叫び/超高音(kruṣṭa)などの違い(bheda)と、音(varṇa)・語(pada)・文(vākya)・さえずり(kūjita)などの区別(avaccheda)があれこれの条件から生じるように、風は一つであっても、[それに]プラヴァハ・アーヴァハ・パリヴァハなどのグループ(skandha)と、呼気(prāṇa)・吸気(apāna)・体内を循環する風(vyāna)などという連続体(anubandha)⁴⁹があれこれの限定条件から生じるように、それとおなじように、恋愛・怒り・悲しみなどは、[ただ]一つであっても、[それに]、あれこれの限定条件から、内的・外的な感情表現と一時的感情が、べつべつにあるいは渾然一体になって(vyavasthāsamplavābhyām)、あふれ出る(upaplavante)。

ここでボージャは、先に対象としての条件によっておこり、かき立てる条件によって高まったひとつの感情から、それを条件付けるもの(upādhi)によって、感情表現と一時的感情がお

⁴⁷ここで芽や果実について「十全な」(sapat)という語を付加するのは、アートマンの十全な属性(ātmaguṇasampat)をボージャが意識しているからである。

⁴⁸ここにあげられる海と波の喩えは、ヴェーダーンタ学派において、ブラフマンと現象界についての喩えとしてよく使用される。たとえば、Śāṅkarabhāṣya ad Brahmasūtra 2.1.13. このことは、中村(1950, 519-20)において触れられている。また中村は同じ箇所、バヴァプーティの『ウツタラーマチャリタ』を引用して、文学作品にあらわれたヴェーダーンタ思想の例としている。Uttarāmacarita 3.47: eko rasaḥ karuṇa eva nimittabhedād bhinnāḥ pṛthak pṛthak ivāśrayate vivartān / āvartabudbudataraṅgamayān vikārān ambho yathā salilam eva hi tatsamastam //

⁴⁹これら五つの「風」は古くはウパニシャッドにまで遡る。Bṛhadāraṇyakopaniṣad I. 5. 3: prāṇo 'pāno vyāna udānaḥ samāno 'na ity etatsarvaṃ prāṇa evaitanmayo vā ayam ātmā vānmayo manomayaḥ prāṇamayaḥ // ((中村訳(1990, 113)「吸気(吸う息, prāṇa), 呼気(出る息, apāna), 媒気(vyāna), 上気(udāna), 等気(samāna)なる息のはたらき(=それら五つに共通するもの), これらすべてはプラーナ(単数)にほかならない。じつにこのアートマンは、この[三つ]よりなる。すなわちことば(発声機能)よりなり、心よりなり、プラーナよりなる。))

こるということを、木⁵⁰、水⁵¹、音⁵²、風、という四つの比喩を用いて説明している。一本の木には、幹や枝などの「様相」(prakāra)があり、また、そこから生じるものとして芽や葉や花などの「変容」(vikāra)がある。また、水には、ある条件のもとで、流れや渦やあぶくなどという「変形」(vivarta)があり、また、真珠や泡などという「変化」(vipariṇāma)がある。音には、音程の「区別」(bheda)があり、また、語や文などという限定(avaccheda)がある。また風には、天

⁵⁰一本の木についての様相(prakāra)と変異(vikāra)の比喩である。一本の木には、幹、大枝、小枝、莖という様相(prakāra)があり、また、芽、葉、花、実という変異(vikāra)がある。一本の木には、幹があり、大きな枝や小さな枝があり、場合によってはつるのあるものもある。この場合、木は木として一つであるが、しかしそこには幹や枝やつるとしてとらえられる多様性がある。一つの恒常的感情には、種々の感情表現と一時的感情という多様性があるということになる。ところで、単一な木とその枝の多様性という比喩は、たとえば、シャンカラのBrahmasūtrabhāṣyaで、不一不異論的な立場からのシャンカラに対する反論者の見解に、ブラフマンの単一性と多様性をあらかず比喩として用いられている。一方、木からは芽が出、さらにそれは葉になり、花が付き、実が実る。ここで、先におこった感情は一本の木であり、それには様相(prakāra)として大枝や小枝あるいは莖があるのとおなじように、種々の感情表現や一時的感情がある。あるいは、一本の木から、変異として芽や葉が出て、花が咲き、実が実るのと同じように、先におこったひとつの感情から変異としてさまざまな感情表現や一時的感情がおこる。この樹木と果実の喩えは、おそらく『ナーティヤシャストラ』を意識したものである。NŚ VI.38 yathā bijād bhaved vṛkso vaksāt puṣpaṃ phalaṃ yathā / athā mūlaṃ rasāḥ sarve tebhyo bhāvā vyavasthitāḥ // (上村訳(1990, 370)「種から樹が生じ、樹から花と果実が生じるのと同様に、すべてのrasaは根源(mūla)であり、それらからbhāvaが成立させられる。))

⁵¹ここで海水には、変様(vivarta)と変化(vipariṇāma)の二つが立てられている。例から判断すれば、前者は質的な変化を伴わない場合、後者は質的な変化を伴う場合を指していると考えられる。水とあぶく、波、泡の比喩は、ヴェーダーンタ学派の不一不異論の系統で、海水が波とは異なっておりかつ異なっていないのとおなじように、ブラフマンと現象世界も異なっておりかつ異なっていないという不一不異説(bhedābhedavāda)の説明によく使用されるものである。しかし、ここでは、あぶくと波は海水の変様、泡は海水の変化とされているから、あぶく、波、泡が同列に扱われていると考えることは出来ない。

⁵²音には、高(tāra), 中(madhya), 低(mandra), 叫び/超高音(kruṣṭa)という違い(bheda)と音(varṇa), 語(pada), 文(vākya), さえずり(kūjita)などの区別(avaccheda)がある。違い(bheda)であげられる高, 中, 低は, Tāitirīyapraśākhya XXII.13 にみられる発声場所による音色の違いである。

上を吹く風や地上を吹く風などの「グループ」(skhandha)があり、体内を吹く風などの「連続体」(anubandha)がある。これらによってボージャが意図しているのは、木、水、音、風というそれぞれひとつのものが、視点の相違やその変化などによって種々のありかたをとる、というという点にあると思われる。

ひとつの感情からおこる感情表現と一時的感情は、以上のように説明されるが、それらは、内的なもの(ābhyantara)と外的なもの(bāhya)にそれぞれ分類される。具体的には、内的な感情表現とは、想起・欲・嫌悪・努力であり、外的な感情表現は、心の活動・言葉の活動・意識の活動・身体活動である。内的な一時的感情は、物思い・期待・狼狽・熟考などであり、外的な一時的感情は、汗・立毛・涙・顔色が変わることなどである⁵³。

恋愛という感情からおこる感情表現と一時的感情の例として、ボージャは『クマラサンバヴァ』の詩節を引く⁵⁴。

山の娘 [パールヴァティー] もまた、芽を出した若いカダンバの木に [に似て鳥肌のたった]

⁵³ŚP 689.3, J 445.12: tatrābhyantarā vyabhicāriṣu cintautsukyāvegavitarkādayaḥ, bāhyāḥ svedaromāñcāśruvaivarṇyādayaḥ, anubhāveṣv abhyantarāḥ smarāṇecchādveṣaprayatnāḥ, bāhyā manovāgbuddhiśarīrārambhāḥ / (「それらのうち、内的なものは、一時的感情の場合は、物思い・期待・狼狽・熟考などであり、外的なものは、汗・立毛・涙・顔色が変わることなどである。感情表現については、内的なものは、想起・欲・嫌悪・努力であり、外的なものは、心の活動・言葉の活動・意識の活動・身体活動である。)」)

⁵⁴ŚP 689.6, J 445.15: teṣu ratiprabhavā yathā / vivṛṇvatī śailasutāpi bhāvam āṅgaiḥ sphuradbālakadambakalpaiḥ / śācīkṛtā cārutareṇa tasthau mukhena paryastavilocanena / (Kumārasambhava III.68) if 訳すれば、「その眼をきよろきよろさせているいつそう愛らしい顔で、[彼女は]斜めに傾けられていた」となるが、下にあげたマリナータ注「恥ずかしさで顔を傾けていた (hriyā mukhaṃ śācīkṛtya sthitā)」を参照し、上記のように訳す。なお、この詩頌には異説があり、その説みの方が自然である。Kale の注を参照のこと。Mallīnātha thereon: vivṛṇvatī / śailasutāpi sphuradbālakadambakalpaiḥ vikasatkoma-lanīpasadrśaiḥ pulakitair ity arthaḥ / tṣadasamāptau. . . ityādīnā kalpapratyayaḥ / āṅgaiḥ bhāvam ratyākhyam vivṛṇvatī prakāśyantī cārutareṇa paryastavilocanena vṛḍāvibhrāntanetreṇa mukhena aśāci śāci sampadyamānā śācīkṛtā tiryakkṛtā / tiryagarthe śāci tīraḥ ityamarāḥ / tasthau / hriyā mukhaṃ śācīkṛtya sthitety arthaḥ / na kevalam harasyaiva devyā apy udito ratibhāva iti bhāvah //

⁵⁵四肢で [恋愛という] 感情をあらわしながら、[シヴァにみつめられたはずかしさで] その眼をきよろきよろさせているいつそう愛らしい顔を斜めに傾けていた。⁵⁶

シヴァ神にみつめられたパールヴァティーは、鳥肌という感情表現で恋愛という感情をあらわしており、しかし、その態度は、恥ずかしさのゆえに正面からシヴァ神をみることがない。つまり、自分の恋愛という感情を偽装 (avahittha) という一時的感情でおさえている。

4. 5. つづいてボージャは、それら諸々の感情からラサが生じることを次のように説明する⁵⁷。

サトウキビから汁 (rasa) が、なたねから油が、[金] 鉱石から金が、[鉄] 鉱石から鉄が、練乳からバターが、薪から火が、[それぞれに応じた] あれこれの器具や火や攪拌 [棒] などとの結合にもとづいて生じるのと同様に、それぞれの喚起する条件、感情表現、一時的感情との結合にもとづいて、恋愛や憤怒や悲哀などから、あれこれのラサが生じる。

ここでは、サトウキビ、なたね、金鉱石、鉄鉱石、練乳、薪が諸々の感情にたとえられ、それらから生じる汁、油、金、鉄、バター、火がラサにたとえられ、器具、火、攪拌棒等が喚起する条件、感情表現、一時的感情にたとえられている。ここにみられる比喩は、サーンキヤ学派が因中有果論の説明としてよく使用するものである。

⁵⁵Vivarāṇa on Kumārasambhava III. 68: kadambo vṛkṣaviśeṣaḥ / āṅgānām romāñcitavād atra tatsadrśyam / kadambakusumāni hi romatulyadalāni /

⁵⁶SKĀ V. 138, udāharaṇa 5: anubhāvāder anekasyaikasya vā punarutpattir anubandhaḥ / so 'nekasya yathā / vivṛṇvatī śailasutāpi bhāvam āṅgaiḥ sphuradbālakadambakalpaiḥ / śācīkṛtvā cārutareṇa tasthau mukhena paryastavilocanena // atra devyāḥ smarārau pūrvam utpannā ratih sābhilāṣatadavalokanena viviktavasantādibhir uddīpyamānā romāñcāvahitthalakṣaṇābhyām sātṭvikavyabhicāribhyām anubadhyate //

⁵⁷ŚP 689.19, J 445.26: atha yathekṣubhyo rasaḥ sarṣapebhyas tailaṃ dhātubhyo hiranyaṃ aśmabhyo lohaṃ dadhno navanītaṃ kṣāṭhato 'gnis tebhyas tebhyo yantrāgnimanthasamyogebhyo niṣpatanti tathā svebhyah svebhyo vibhāvānubhāvavyabhicārisamyogebhyo ratikrodhaśokādibhyas te te rasā niṣpadyante /

このラサの生起を説明して、ボージャは次の詩句を引く⁵⁸。

運良く、私は、ラーフの口に入った月の一片(candrakalā)のような最愛の女性[であるマーラティー]に到達し、この盗人の刃がとどく範囲から、[彼女を]連れ出した。恐怖に苦しめられる[心]、悲憤に満ちた[心]、驚嘆でかき乱された[心]、憤怒で燃え上がる[心]、喜びで花開いた[心、というように言葉で表現できる]心がどのようにしてありえようか。

連れ去られ、今にも犠牲として捧げられようとしていた恋人マーラティーを救い出したときに、マーダヴァが語ったことばである。マーラティーを救い出すまでの間に、マーダヴァの心には、恐怖(ātāṅka-bhaya)という恒常的感情、悲憤というラサ、驚嘆という恒常的感情、憤怒という恒常的感情、歡喜(mud=harṣa)という種々の感情が連続しておこっているのである。

4. 6. つぎにボージャがあげるのは、諸々のラサが高まることを説明する比喩である⁵⁹。

さらに、たとえば、塩辛さや酸味など[の味]が、[それらの味]自身と結びついているぶどうなどにもまた、[それら]自身のありかたを持ち込むとき[すなわち同化させるとき]、[それら塩辛さや酸味などが]強まる(upacīyante)。それとおなじように、恋愛等[という恒常的感情]から起こる[シュリンガーラという]ラサが、感情を喚起する条件等にも自身の在り方を持ち込むとき[すなわちラサが喚起する条件等を同化させるとき]、[シュリンガーラというラサは]強まる。

ここでは、先の段階で生じたラサがさらに高まる状態を説明している。この説明は、バラタの *Nāṭyaśāstra* から着想を得ている。ボージャは次の例を引く⁶⁰。

⁵⁸ŚP 689.21, J 446.1: yathā rāhoś candrakalām ivānanacarīm daivāt samāsādyā me dasyorasya kṛpāṅapātaviṣayād ācchindataḥ preyasīm / ātāṅkad vikalaṃ drutaṃ karuṇayā vikṣobhitaṃ vismayāt / krodhena jvalitaṃ mudā vikasitaṃ cetāḥ kathaṃ vartate //

⁵⁹ŚP 690.5, J 446.6: atha yathā lavaṅāmlādayaḥ svasaṃyogino mṛdvikādīn apy ātmarūpatāṃ nayanta upacīyante, tathā ratyādījanmāno rasāḥ vibhāvādīn apy ātmarūpatāṃ nayanta upacīyante /

⁶⁰ŚP 690.8, J 446.8: yathā / kassa bharisi tti bhaṇite ko

「あなたは誰を思いだしているのか」と[私たちが]いったとき、悲嘆の涙にくれる彼女(uvveggaroirīe=udvighnarodanaśīlā)が「[思い出すべき]誰が私にいるのか」といったので、[彼女と]同じようにわたしたちも泣いてしまった。

恋人の男性と別れて泣く女性に、女友達が同情して一緒に泣いてしまったという場面である。別れを嘆く女性の嘆きが、女友達の心を同化させ、それによって女友達の感情が高まる、ということをもボージャは意図しているであろう。

4. 7. さて、つぎにボージャは、ラサとの結合にもとづいて、喚起する条件、感情表現、一時的感情もラサと同等になるという例を示す⁶¹。

さらに、火との結合にもとづいて、サルピス、樹脂、蜜蝋などという地元素に由来するものに、雲、雪、雹などという水元素に由来するものに、錫、鉛、銀などという火元素に由来するものに、流動性(dravatā)という水との共通性(sāmānya)が生じる。それとおなじように、ラサとの結合にもとづいて、喚起する条件、感情表現、一時的感情に、ラサ性(rasatā)というまさしくラサとの共通性が生じる。

ここでは、喚起する条件、感情表現、一時的感情が、ラサとの結合ゆえに、ラサと同等になる、ということが説明されている。それに対する喩例は、地元素に由来するもの、水元素に由来するもの、火元素に由来するもののいずれもある条件下では流動性という水との共通性を得る、ということである。この喩例は、ヴァイシェシカ学派がいう属性の一つである流動性(dravatva)を説明する際のプラシャスタパーダを連想させる。しかし、ボージャの意図は、真のラサとは本来まったく別の喚起する条件などがラサとの共通性を得て、一体となって高まり

me athi tti jappamānāe / uvveggaroirīe amhe vi ruāviā tīe // (*Gāthāsaptasatī* IV.89)[Chāyā: kasya smarastī bhaṇite ko me 'stīti jalpamānaya / udvighnarodanaśīlayā vayam api roditāḥ tathā //]

⁶¹ŚP 690.11, J 446.10: atha yathā sarpirjatu-madhūcchīṣṭādīnām pārthivānām ghanatuhinakarakādīnām āpyānām trapuṣīsarajatādīnām taijasānām agnisamyogād dravatā adbhīs sāmānyam bhavati, tathā vibhāvānubhāvavyabhicāriṇām rasasamyogād rasatā rasenaiva sāmānyam bhavati /

うるということを説明することにある。

ボージャは例として、次の詩句を引く⁶²。

以上のように、コーサラの王 [であるアジャ王] は、悲しいことにうちひしがれて、愛する妻 [であるインドウマティーにむかって、嘆き、木々にも [その] 枝から樹液という涙の雨を流させた。

ここでは、妻を亡くしたアジャ王はの嘆き悲しみによって、地より生えるものである木も、涙としての樹液を流す。すなわち、地元素に由来する木にも流動性という水との共通性がおこっている。

5. 後段階

5. 1. 次の後段階は、次のようにいわれる⁶³。

そして、[ダンディンは、先に提示した KĀ II.275 において]「よりつよい喜びの表現 (priyatarākhyāna) が preyaḥ [という修辭] である。」[と述べる] ことによって、全ての感情の最高位におかれる恋愛が最高潮に達した後に、[感情を] 生ぜしめるはたらき (bhāvanā) の道を踏み越えるとき、[その恋愛という感情は] 感情という性格 (bhāvarūpatā) 超越し (ullaṅghya)、愛 (preman) に変化する (pariṇatā)。[その変化する恋愛を] 述べることによって [恋愛以外の] 他の感情にも [それらが] 最高潮に達するとき、ラサに変化する。このように説明して、[ダンディンは] 自我意識の最高の限界点を示している。

ここで、先の中間段階でおこっていた種々の感情は、感情という段階をこえ、再度それらが生じたところの愛 (preman) に変化 (pariṇati) する。中間段階では、種々の感情がさまざまにおこり、それらが唯一のラサを条件付け、炎が一体となって大きな火となるように、ラサと一体となって最高潮にまで達した。しかし最高潮まで達しつつもそれは依然として感情とよばれるものである。そして、目下の後段階において、それは、愛へと変化する。その際に、「生ぜし

⁶²Raghuvamśa VIII. 70: vilapanniti kosalādhipaḥ karuṇārthagrathitaṃ priyaṃ prati / akarot pṛthivīrūhān api srutaśākhārasabāṣpadurdinān //

⁶³ŚP 675.7: preyaḥ priyatarākhyānam ity anena ca samastabhāvamūrdhāmiśiktāyā ratch paraprakarṣādhiḡamād bhāvanāpathātikrame bhāvarūpatām ullaṅghya premarūpeṇa pariṇatāyā upādānād bhāvāntarāṅgam api paraprakarṣādhiḡame rasarūpeṇa pariṇatir iti jñāpayann ahānkārasayottamāṃ koṭim upalakṣayati /

めるはたらき」の道、すなわち領域を踏み越える、という転換点がある。

5. 2. それでは、この「[感情を] 生ぜしめるはたらき」はどのようなものと考えることができるだろうか。ボージャは、ŚPI v.10 で、感情とラサの違いを説明して、次のように述べている⁶⁴。

感情は、人が、[感情を] 生ぜしめるはたらきがおこるまで、他のものにころを向けないで (ananyadhiyā)、心のなかに、[感情を] 生ぜしめるはたらきによって生ぜしめる (bhāvyaṭe) ものである。[一方] ラサは、生ぜしめるはたらきの経路 (bhāvanāpatha) を超えて変容するとき (vivartamāna)、自我意識を有する (sāhaṃkṛti) 心 (hr̥d) の中で、最高に味わいのあるものである。

ここで、「生ぜしめるはたらき」は、感情を生ぜしめるものであることが分かるであろう。「他のものにころを向けないで」というのは、次の箇所を参考にする必要はある。ボージャは、恒常的感情は、バラタカ[恒常的感情としてあげた八つに限定されることはないとして、次のように述べる⁶⁵。

生じた強い潜在印象にもとづいて、それらは恒常的感情[となる]。そして潜在印象の生起は、卓越した対象と男性主人公 (nāyaka) の性格 (prakṛti) にもとづく。そして、主人公の性格には、純質性 (sāttvikī) と激質性 (rājasī) と暗質性 (tāmasī) という三種類がある。そして、それらとの結びつきにもとづいて、そのような種類の経験の生ぜしめるはたらきが起る。したがって、それら [諸々の感情] は、恒常的感情と呼ばれる。

恒常的感情が持続するための二つの条件があり、一つは対象の卓越性である。これは、恋愛

⁶⁴ŚP 5.3[v. 10]: ā bhāvanodayam ananyadhiyā janena yo bhāvyaṭe manasi bhāvanayā sa bhāvaḥ / yo bhāvanāpatham atitya vivartamānaḥ sāhaṃkṛtau hr̥di paraṃ svadate raso 'sau //

⁶⁵ŚP 664.9: yad apy uktaṃ paraprakarṣāgāmī ratyādi-bhāvo rasa iti tad apy asāram / glānyādiṣv api tad upapatteḥ / glānādayo 'pi hi śramādibhiḥ paraṃ prakarṣam āropyante / na te sthāyina iti cet sthāyitvam eṣām utpannativrasaṃ-kārāt / saṃskārotpattiś ca viṣayātīśayān nāyakaprakṛteś ca / nāyakaprakṛtiś ca tridhā sāttvikī, rājasī, tāmasī ca / tadvasāc ca tathāvidhānubhavabhāvanotpattiḥ / tatas caīśām sthāyitvavyapadeśa iti /

の場合であれば、優れた恋人ということになるであろう。また、その対象をみた場合に、それが強い潜勢力を残すかどうかは、対象の側だけでなく、それを見る側も問題となる。それが主人公の性格である。それには純質性のもとの激質性のもとの暗質性のもとのいう三種がある。そして、それに応じてそれぞれの経験による「生ぜしめるはたらき」がおこるとされている。これらから考えると、「生ぜしめるはたらき」には、二つの側面がある。一つは、なんらかの対象の経験にもとづいて心に残るものという側面であり、いまひとつは、感情を生ぜしめるという側面である。ここでボージャが「生ぜしめるはたらき」というのは、ヴァイシェーシカ学派でいう潜勢力 (saṃskāra) のひとつとしての印象 (bhāvanā) に近い意味をもっているのではないかと思われる⁶⁶。ボージャが「生ぜしめるはたらき」(bhāvanā) と潜勢力をどのような関係においているかははっきりとしないが、すくなくとも植え付けられた潜勢力をもとに感情をひきおこすはたらきが「生ぜしめるはたらき」(bhāvanā) であると考えてよいのではないかと思われる。

⁶⁶ Praśastapādabhāṣya 267.2: bhāvanāsañjnakas tv ātmaguṇo [I] dṛṣṭaśrutānubhūteṣv artheṣu smṛtipratyābhijñānahetur bhavati jñānamadaduḥkhādivirodhī, paṭyabhyāsādarapratyayajāḥ, paṭyupratyayāpekṣād ātmamanasoḥ saṃyogād āścarye 'rthe paṭuḥ saṃskārātīśayo jāyate / yathā dākṣiṇāt yasyoṣṭradarśanād iti / vidyāśilpavyāyāmādiṣv abhyasyamāneṣu tasminn evārthe pūrvapūrvasaṃskāram apekṣamānād uttarottarasmāt pratyayād ātmamanasoḥ saṃyogāt saṃskārātīśayo jāyate / prayatnena manas cakṣuṣi sthāpayitvā 'pūrvam arthaṃ didṛkṣamāṇasya vidyut-sampātadarśanavad ādarapratyayajāḥ tam apekṣamānād ātmamanasoḥ saṃyogāt saṃskārātīśayo jāyate / yathā devahrade rājatasauvarṇapadmadarśanād iti / (印象と呼ばれる [潜勢力は] アートマンの属性である。[それは] 見られたり聞かれたり経験されたりした対象に関する想起と再認の原因である。[それは] 認識、酔い、苦等と相容れない。[それは] 強烈な知から生じたものと、繰り返しに基づく知から生じたものと、熱心さに基づく知から生じたものである。強烈な知を期待する、アートマンと意の結合にもとづいて、驚くべき対象に関する、強烈な、卓越した潜勢力が生じる。たとえば、南方から来た人がラクダをみることから [それは生じる]。学術や芸術や体操などが繰り返されるならば、まさにそ [の学術など] に関して、順々に先行する潜勢力を期待する後続の知から、アートマンと意の結合に基づいて、卓越した潜勢力が生じる。たとえば天の池に金銀の蓮の花を見ることから [それが生じる]。)

5. 3. この後段階においては、感情を「生ぜしめるはたらき」の領域を越えているのであるから、通常の感情とよべるものはなにもないことになる。その状態をボージャは愛 (preman) と呼んだのである。ボージャは次のようにいう⁶⁷。

そして、ここ [本書] では、ラサは愛にほかならないといわれている。なぜなら、恋愛などが最も高まったとき、[それらは] すべて、まさに愛にいきつく (paryavasāna) からである⁶⁸。[すなわち] 恋愛を愛するひと (ratipriya)、争いを愛するひと (raṇapriya)、怒りを愛するひと (amaṛṣapriya)、滑稽を愛するひと (parihāsapriya)、というように。

ここで、前段階において、シュリンガーラ、思念、自我意識であったものが、中段階という種々の感情の高まりの段階をへて最高潮に達し、呼び名は「愛」といわれるけれども、それらがもともとおこった無感情の状態にもどる、ということもボージャは述べているのである。

6. まとめ

以上の検討をまとめておこう。まず、1. では、ボージャが真のラサとする「思念」「自我意識」「シュリンガーラ」とはなにかということを検討した。それは、まず、恋愛という感情の検討を出発点としていた。人間が恋愛という感情を感じるのは、すべてそれらにもとづいているはずだという点にボージャの発想の源はある。そして、ボージャはそれを恋愛のみならず人間の感情一般にまで敷衍した。人間のすべての感情の根底にあり、それなくしてはいかなる感情をもおぼええないもの、それをボージャは真の意味でのラサとしたのである。つづいて2. 以降では、心の中にラサが目覚める前段階、そして具体的な感情がおこり、種々の要素と渾然一体となって、炎が燃え上がるように燃え上がる中段階、そしてそれが一切の個別的な感情を離れ、感情を生ぜしめるはたらきの道を超越し、

⁶⁷ ŚP 662.10, J 429.7: rasaṃ tv iha premāṇam evāmananti / sarveṣāṃ api hi ratyādiprakaṣṇāṇāṃ ratipriyo raṇapriyo amaṛṣapriyah parihāsapriya iti preman eva paryavasānāt /

⁶⁸ 「愛へいきつく」(paryavasāna) に関して。たとえば、Yogasūtra 1.45 では、根本原質からの現象世界開展の逆順序をたどって、最も微細な (sūkṣma) 根本原質へ到達する (paryavasāna) と説明する。

感情を超えた愛にいたる後段階、というラサの三段階を検討した。その検討の過程でみたように、種々の比喩を用い、種々の哲学説を利用しながら、ボージャは彼独特のラサ理論を築き上げたのである。

参考文献および略号

- Amarakośa*: K. G. Oka, ed. *The Nāmalingānuśāsana Amarakośa of Amarasimha with the Commentary (Amarakośodghāṭana of Kṣīrasvāmin)*. Delhi: Upāsana Prakāśan, 1981 (Reprint).
- Uttararāmacarita*: P. V. Kane and C. N. Joshi, eds. *Uttararāmacarita of Bhavabhūti, with the Comm. of Ghanaśyāma*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1962 (4th ed.).
- Kāmasūtra*: Devduṭṭa Śāstrī, ed. *The Kāmasūtram of Śrī Vātsyāyana Muni, with the Jayamañgalā Sanskrit Commentary of Śrī Yaśodhara*. Kashi Sanskrit Series 29. Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan, 1992 (4th ed.).
- Kāvyaadarśa* (KĀ): Rangacharya Raddi Shastri, ed. *Kāvyaadarśa of Daṇḍin*. Government Oriental Series, Class A, No. 4. Poona: Bhandarkar Oriental Institute, 1970 (2nd ed.).
- Kumārasambhava*: M. R. Kale, ed. *Kālidāsa's Kumārasambhava, edited with the Commentary of Mallinātha, A Literal English Translation, Notes and Introduction*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1981 (17th ed.).
- Nāṭyaśāstra* (NŚ): R. S. Nagar, ed. *Nāṭyaśāstra of Bharatamuni, with the Commentary Abhinavabhāratī of Ācārya Abhinavagupta*. Parimal Sanskrit Series 4. 4 vols. Delhi: Parimal Publications, 1998.
- Nyāyamañjarī* (NM): K. S. Varadacharya, ed. *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa*. University of Mysore Oriental Research Institute Series 116 and 139. 2 vols. Mysore: Oriental Research Institute, 1969-1983.
- Prasastapādabhāṣya*: Vindhyaesvari Prasad Dvivedin, ed. *The Prasastapādabhāṣya with Commentary Nyāyakandālī of Śrīdhara*. Delhi Sri Satguru Publications, 1984 (2nd ed.).
- Mālatīmādhava*: Ramakrishna Gopal Bhandarkar, ed. *Mālatīmādhava of Bhavabhūti with the Commentary of Jagaddhara*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series 15. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1970.
- Yuktidīpikā*: Albrecht Wezler and Shujun Motegi,

- eds. *Yuktidīpikā*. Alt- und Neu-Indische Studien 44. Hamburg: Institut für Kultur und Geschichte Indiens und Tibets an der Universität Hamburg, 1998.
- Vikramorvaśīya*: M. R. Kale, ed. *Vikramorvaśīya of Kālidāsa with the Commentary Arthaprakāśikā. Śāradākṛīdanagranthamālā 6*. Bombay: Śāradākṛīdan Press, 1903 (2nd ed.).
- Vaiśeṣikasūtra* (VS): Jambuvijaya, ed. *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda*. Baroda: Oriental Institute, 1982.
- Rāmacarita*: K.S. Ramaswami Sastri, ed. *Rāmacarita of Abhinanda*. Gaekwad's Oriental Series 44. Baroda: Oriental Institute, 1930.
- Sāṅkhyakārikā* (SK): *Sāṅkhyakārikā of Īśvarakṛṣṇa*. Varanasi: Vyasa Prakashan, 1989.
- Sarasvatīkaṇṭhābharaṇāṅkāra* (SKĀ): Bishwanath Bhattacharya, ed. *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇāṅkāra of Bhoja*. Varanasi: Banaras Hindu University, 1979.
- Śṛṅgāraprakāśa* (ŚP): V. Raghavan, ed. *Śṛṅgāraprakāśa of Bhoja*. vol. 1. Harvard Oriental Series 53. Cambridge: Harvard University Press, 1998.
- Pollock, S.
1998 Bhoja's *Śṛṅgāraprakāśa* and the Problem of Rasa: A Historical Introduction and Annotated Translation. *Asiatische Studien/Études Asiatiques* 52-1: 117-192.
- Raghavan, V.
1967 *The Number of Rasas*. The Adyar Library Series. Madras: Adyar Library and Research Centre.
1978 *Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa*. 3rd. ed. Madras: Punarvasu.
- 上村勝彦
1967a Bhaṭṭa Narasimha's *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇa-vyākhyā* (Pariccheda I). *Buddhist Studies* (『佛教学研究』) 5: 100-140.
1976b Bhaṭṭa Narasimha's *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇa-vyākhyā* (Pariccheda I-3). *Journal of Indian and Buddhist Studies* (『印度学仏教学研究』) 49 (25-1): 503-511.
1976c Bhaṭṭa Narasimha's *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇa-vyākhyā* (Pariccheda II-1). 『仏教思想論集』(奥田慈應先生喜寿記念) 所収
1990 『インド古典演劇論における美的経験』東京大学東洋文化研究
金倉圓照
1971 『インドの自然哲学』平楽寺書店

川口 賢

- 1985 「Advaita Vedānta 学派における〈変様〉
(vṛtti) の概念」『哲学』(広島哲学会) 37:
101-116.

中村 元

- 1950 『初期のヴェーダーンタ哲学』(初期ヴェー
ダーンタ哲学史 第一巻) 東京: 岩波書店
1990 『ウパニシャッドの思想』(中村元選集9)
東京: 春秋社

服部正明

- 1969 「古典サーンキヤ体系概説」『世界の名著
1』所収. 東京: 中央公論社.

本田義央

- 2004 「インド古典修辞学における修辞と感情」
『比較論理学研究』2: 31-38.

(ほんだ よしちか, 広島大学 [インド哲学])